

# 教員養成における図画工作立体表現の課題研究

—— 粘土造形の授業実践内容を中心に ——

栗原 慶

(キーワード：図画工作、技能、造形遊び、授業実践、教材研究)

## 1. はじめに

小学校図画工作科の新学習指導要領（平成29年告示）では、教科の目標が各教科共通の三つの柱に対応して示されている。これまでの指導自体が変質するわけではないが、教科の意義として何を学び何ができるようになるのかといったことをより明確にしていくことが求められる。教員養成を目的とした教科専門科目の視点においても、小学校教員免許取得に必要な授業内容が、新学習指導要領に即したものとなっているかを省察していかねばならない。

教員としての未来を描く学生らが実際に図画工作を教える際には、美術を専門にするかしないか、得意か苦手かということに左右される訳にはいかず、授業を展開するための一定レベルの実技能力が大切だと考える。指導要領で示す内容は教科の本質や理念を示したものであり、教える側がその意味を体感として得ていなければ、授業実践が困難になるからである。学生期の表現活動や鑑賞の質の向上のみが指導能力を保証するものではないが、自らの身体を通してものを生み出す経験の質そのものが成功体験として学生の記憶に残り、この教科を学び伝える姿勢を培っていく。だが教科内容を学ぶ短い時間の中で、学生の造形に対する力量育成のプロセスが適切なものとなっているのか、自身の授業課題設定での過不足について検討し続ける必要性を感じている。

そこで本学学部の教科の専門科目である図画工作 I において、筆者が担当している立体分野の授業実践内容について検討した。学習指導要領で示されている目標及び内容の事項は、児童に対するものであることと同時に、指導者が修得していることを前提とした教科内容そのものでもある。筆者が担当する立体表現の課題では何ができるようになるのか、粘土による造形遊びの授業実践をもとに考察した。

## 2. 図画工作 I について

本稿で取り上げる図画工作 I は、約100名の学生数に対する教室の制約、並びに実技の専門的実践の関係から、所属コース単位で50名程度の二つのクラスに振り分け、I A、I B として運営している。そしてさらにどちらのクラスも平面分野と立体分野の要素を学べるように、I A は絵画専門と工芸専門の教員、I B は彫刻専門とデザイン専門の教員によって、7回ごとの授業を交互に担当している（図1）。

これによって2013年度から、一教員あたり25名程度を教員自身の専門性を活かしながら指導している。運用面で指摘される場所は、A、B クラスの振り分けによって、同じ平面分野としての絵画・デザイン、立体分野としての彫刻・工芸の教員それぞれの課題が異なり、指導内容に違いが出るのではないかと危惧されることである。しかしこの授業での使用を考慮して制作した教科書<sup>1)</sup>を参照すれば、各分野の課題には、材料や道具の扱いの他に、基礎的な二つの実技能力の修得に焦点が当てられ、実践されていることが分かるだろう。一つは対象や課題を的確に把握することによる表現力、もう一つは素材や場、形や色、制作過程などから得る発想力であり、造形アプローチの基本となる要素となっている。また、純粹・応用美術の教員が両方のクラスに相互に配置されることで、制作の思考過程の差異にも対応している。例えば応用美術の観点は、I A では立体分野で、I B では平面分野の授業でより深く考えることができるようになっている。

### (1) 授業の目標

I A、I B クラスとも、シラバスの目的及び主旨・到達目標は共通で、以下の通りである。  
・図画工作科指導者としての資質の向上を図る。

- ・学習指導要領の内容との関連を図りながら、各専門分野の要素を取り込んだ入門的実技制作を交えることにより、指導能力の基礎となる実技能力の向上を図る。
- ・教育現場において生きて働かせる実技指導能力の基礎を養う。

2018年度図画工作Ⅰ 授業運営図

		図画工作Ⅰ(A・B共通) 初回オリエンテーション(本日)			
		図画工作Ⅰ-A		図画工作Ⅰ-B	
班分け▶		Aの花組 学校教育実践、理科・保健・体育、 (28名)	Aの月組 音楽、美術・図工、技術、家庭、 (28名)	Bの雪組 幼児教育専修、国語、英語、 (27名)	Bの星組 社会、数学・算数、特別支援、 (28名)
第1回 4/13		図画工作Ⅰ(A・B共通) 初回オリエンテーション(本日)			
第2回 4/20		描画材の解説、調子を描く	造形遊びを念頭に置いた立体表現 (立体表現の課題説明)	素描その1(模写) 講義、解説及び実技指導	立体表現の解説と課題説明と 顔(頭部)のデッサン
第3回 4/27		立方体を描く	造形遊びを念頭に置いた立体表現	素描その2(クロッキー) 講義、解説及び実技指導・次課題説 ブックカバーデザインのための各種 解説及びアイデアスケッチ制作	油粘土によるマスクの制作
第4回 5/11		円柱を描く	木片を用いた立体表現	ブックカバーデザインのための各種 解説及びアイデアスケッチ制作	油粘土によるマスクの制作
第5回 5/18		身近にあるものを描くⅠ (四角型のもの)	木片を用いた立体表現	ブックカバー案スケッチ制作 及び確認	油粘土によるマスクの制作
第6回 5/25		身近にあるものを描くⅡ (円柱形のもの)	木片を用いた立体表現	ブックカバー案スケッチ制作 及び確認	造形遊びを念頭においた立体表現
第7回 6/1		絵の具の重色と混色	自分の「手」を粘土で制作	ブックカバーデザイン制作	造形遊びを念頭においた立体表現
第8回 6/8		モダンテクニック実習	自分の「手」を粘土で制作 (レポート提出)	作品講評(レポート提出)	造形遊びを念頭においた立体表現
第9回 6/15		造形遊びを念頭に置いた立体表現 (立体表現の課題説明)	描画材の解説、調子を描く	立体表現の解説と課題説明と 顔(頭部)のデッサン	素描その1(模写) 講義、解説及び実技指導
第10回 6/22		造形遊びを念頭に置いた立体表現	立方体を描く	油粘土によるマスクの制作	素描その2(クロッキー) 講義、解説及び実技指導・次課題説
第11回 6/29		木片を用いた立体表現	円柱を描く	油粘土によるマスクの制作	ブックカバーデザインのための各種 解説及びアイデアスケッチ制作
第12回 7/6		木片を用いた立体表現	身近にあるものを描くⅠ (四角型のもの)	油粘土によるマスクの制作	ブックカバー案スケッチ制作 及び確認
第13回 7/13		木片を用いた立体表現	身近にあるものを描くⅡ (円柱形のもの)	造形遊びを念頭においた立体表現	ブックカバー案スケッチ制作 及び確認
第14回 7/20		自分の「手」を粘土で制作	絵の具の重色と混色	造形遊びを念頭においた立体表現	ブックカバーデザイン制作
第15回 7/27		自分の「手」を粘土で制作 (レポート提出)	モダンテクニック実習	造形遊びを念頭においた立体表現	作品講評(レポート提出)

図1 2018年度図画工作Ⅰ 授業運営図<sup>2)</sup>

(2) 立体分野の課題内容

受講の対象となる学生は、美術コースの学生を除くと美術関連の学びから久しく離れた者が多い。限られた授業回数で、要点や面白さを伝えていく方策を探っている。筆者が担当しているⅠA・立体分野7回分の授業は、【造形遊びを念頭においた立体表現】【木片を用いた立体表現】【自分の「手」を粘土で制作】という3つの課題を行い、最後に鑑賞に関するレポートを課している。これらの課題は、改訂前の学習指導要領を基に、表現、鑑賞、共通事項で示された内容を鑑みて設定した。7回の授業で行うには3つの課題設定は過大かもしれないが、「A表現」の内容で示された造形活動の二つの側面<sup>3)</sup>である「材料やその形や色などに働きかけることから始まる側面」「自分の表したいことを基に、これを実現していこうとする側面」を念頭に置きつつ、違う素材を体験すること、道具の扱い方を知ることを含んだ内容とするため設定している。以下に簡単ではあるが、各課題で行なっている目的と内容を記す。本稿で紹介しきれない作例写真は前述の教科書を参照して頂きたい。

① 【造形遊びを念頭においた立体表現】(粘土を使って自由に造形イメージに向けて具現化していく)

この課題は、素材や制作過程における発見などを基に、発想や構想をしていく体験をしながら、制作アプローチを知る活動として行っている。「材料やその形や色などに働きかけることから始まる側面」に比重を置いている。身体を使った行為によって粘土に働きかけていくもので、作品の完成自体が本来の目的にはならない。グループ活動による発表や鑑賞の時間も設定した。

② 【木片を用いた立体表現】(木片を組み合わせることで立体的な作品を作る)

この課題は、当授業の前担当の先生が行われていた課題<sup>4)</sup>をもとに、引き継いで実践させて頂いているものである。校庭などで拾った小枝から得たイメージを基に、制作イメージに絡めて見立て、加工した木片と組み合わせることによって立体工作を行う課題である。見立てること、イメージに向かって計画通りに加工していくこと、

適切に道具を使い完成度を高めることを課している。見立てる作業が「材料やその形や色などに働きかけることから始まる側面」に対応しており、イメージに向かって計画通りに加工していくこと、適切に道具を使い完成度を高めることが「自分の表したいことを基に、これを実現していこうとする側面」に対応するよう設定している。

### ③ 【自分の「手」を粘土で制作】（手を観察し粘土で再現する）

この課題の目的は、客観的な造形力を養うことである。針金によって心棒を作り、粘土の直づけによって造形していく。造形活動の二つの側面に鑑みれば、「自分の手の再現」という明確な到達点があるため、「自分の表したいことを基に、これを実現していこうとする側面」の要素が強い課題である。しかし同時に、制作過程で試行錯誤しながら進めていく要素や、それによる技能の育成の要素が相応にある。日頃見慣れている自分の手であっても、再現するという行為により対象や素材に対する新しい発見を得るという点で、「材料やその形や色などに働きかけることから始まる側面」の要素も持ち合わせている。

### (3) 検討すべき課題として

以上の3つの課題を通して、造形活動の要点を学べるように設定しているため、授業全体でみれば実技能力の基礎を養うことにつながると考える。では個々の課題についてはどうだろうか。2番目に設定している【木片を用いた立体表現】は、造形活動の二つの側面が課題の意図に含まれており、材料や用具の扱いに関する事項も考慮されるなど一つの課題として完成して、学生が教壇に立つ際も高学年向けの教材としてそのまま活用できる。また【自分の「手」を粘土で制作】についても、到達目標が明確であり、観察を基にした表現としてすでに成立した課題であると考えられる<sup>5)</sup>。平面分野で行われている素描の要素を、立体表現に置き換えた内容とも言え、デッサン力の向上に役立っている。しかし、【造形遊びを念頭においた立体表現】の授業実践は、過程に重きをおく課題の性質から、学生にとっても造形遊びが遊びのまま終わってしまうことなどがあり、授業者として検証の必要性を感じている。小学校現場で行う造形遊びの、「単に遊ばせることが目的ではなく、進んで楽しむ意識をもたせながら、発想や構想、創造的な技能などの能力を育成する意図的な学習」<sup>6)</sup>とされている趣旨の理解について、課題のあり方が完成しているとはまでは言えない。

また今回の改訂では、造形遊びをする活動が、育成を目指す資質・能力の三つの柱に沿う形で示された(表1)。本授業の担当となり造形遊びに関する課題設定をした際には、技能からのアプローチにはさほど触れていなかったため、最近では内容や実施方法に修正を加えるなど改善を試みている。以上のことから冒頭でも述べた通り、次項では粘土による造形遊びの授業実践を中心に考察する。

表1 造形遊びをする活動<sup>7)</sup>

「A 表現」 (1) ア	造形遊びをする活動を通して育成する「思考力、判断力、表現力等」
(2) ア	造形遊びをする活動を通して育成する「技能」
〔共通事項〕(1) ア	「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して育成する「知識」
イ	「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して育成する「思考力、判断力、表現力等」

## 3. 造形遊びを念頭においた立体表現の実践について

この課題を行い始めた当初は、特に行為による素材の発見を主な目的とした<sup>8)</sup>。教科書に記載した課題は、粘土を使って自由に造形をすること、それをもとにイメージに向かって到達点を探ることであるが、素材としての土の表情を発見し、具現化の過程を体験することを意図しており、作品として完成させることを目的にはしていない。以下にこれまでの実践方法の変遷を述べる。

### (1) 初期の実践方法

造形活動の要素を比較しながら進めるために実践を2回に分ける。素材としての土であるという視点を念頭に置けるよう、できるだけ粘土の量を多く配分する<sup>9)</sup>（一人あたり6kg以上準備）。1回目は個人制作、2回目は4人～5人のグループ制作で行う。まず1回目で様々な行為を粘土に与える。次に行為の結果を基にイメージを決めグループ制作をする。最後にグループごとの発表をするという手順で行う。

【方法】

- ① 適度な水分によって粘りとともに可塑性が生じ、造形が容易に可能となることを口頭で伝える。金属スプーン、竹串、歯ブラシ、スポイト、ドライヤーなどを準備し、思い思いの行為を粘土に加えていく。この時、具象物をかたどることは不可とする。
- ② 次に5名程度になるようグループ分けをし、行為を基に統一したイメージを決めさせる。
- ③ グループでイメージを決定した後、共同で一つの作品を作り上げていく。粘土は各自が持つ6 kg程度を合わせて30kg以上とし、使い切るようにする。
- ④ 出来上がったら、グループごとに作品の意図や気づきを発表させる。

【結果】

この課題の場合、過程を重視しているため、個人制作の経過から観察した内容を述べる。以下の3通りが特徴として挙げられる。

- ① 趣旨を理解し、素材として粘土の特徴を探す者（ドライヤーで乾かして、ひび割れの表情を見つけるなど）
- ② 自分の頭の中にある具体的なものから、発想しようとする意識が強い者（野菜や音符などの直接的な形が作られることがある）
- ③ 粘土で遊んでしまう者（行為を自己の感情の発散として行い、素材の様子や変化を感じ取ろうとしない）

②の状態になる場合は、潜在的なイメージで作ることに縛られ粘土の特徴を活かしていないということである。ものを作る着想は、自分の経験から得たものからしか出てこないため、このこと自体に問題があるわけではない。しかしこれでは、経験から発見しようとする視野、創作の発展が望めないことになる。③となる場合は、行為を施すということばかりが先行し、肝心の素材を見つめる視点が抜け落ちてしまっているということである。

解釈は多様であっても良いが、行為を施すという提示だけでは②や③の状態になることが顕著となった。結果的にはグループ制作の発表を行うことが、課題の趣旨を共有するために有益であった。

(2) 記述による行為の明確化

2016年度からは、1回目の実践での理解を進めるために、「動詞」や「形容詞」を拠り所にするよう誘導した<sup>10)</sup>。教材の趣旨を見失わない程度の目的設定は、作業を進める上で自分の行為を確認しやすくすることに役立つと考えたからである。また制作を振り返るため、「～でつくる（土で作る）」と「～をつくる（イメージのみ）」に関する記入と、作品写真を添付するプリント（制作シート）（図2）を準備した。

【方法】

1回目・粘土の性質の認識（図3）

- ① 行為によって出来上がった粘土の表情や形体が、イメージした動詞に沿っているか鑑賞する。制作シートにその「動詞」を記載する。
- ② 学生同士互いに鑑賞し、それぞれが感じたことを作品横に置いた制作シートの記入欄に記入していく。他者からの感想や指摘を基に、自己の気づきを記入する。
- ③ 教員は作品を順次撮影する（2回目の制作時前に、写真を添付し学生に返却するため）。制作シートを回収し、粘土を練り直させて、片付ける。

2回目・イメージの伝達と共同制作（図4）

- ① 前回行った動詞を基にした制作シート（写真を添付したもの）を返却する。グループ内で見せ合い、その中の面白い行為を基に、統一した「形容詞」を決めさせる。
- ② イメージした形容詞に沿って各自アイデアスケッチをする。
- ③ 全体のイメージを決定した後、共同で一つの作品を作り上げていく。粘土は各自が持つ6 kg程度を合わせて30kg以上とし、使い切るようにする。

制作シート課題① コース \_\_\_\_\_ 名前 \_\_\_\_\_  
 ~でつくる（土で作る、具象物は不可）  
 1. 動詞を複数記入  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 2. お互いに鑑賞して感じたことを書いてあげてください。  
 1 \_\_\_\_\_  
 2 \_\_\_\_\_  
 3 \_\_\_\_\_  
 4 \_\_\_\_\_  
 5 \_\_\_\_\_  
 6 \_\_\_\_\_  
 自己の気づき  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_

図2 制作シート

- ④ 出来上がったら、グループごとに作品の意図や気付きを発表させる。
- ⑤ 制作シートに自己の気付きを記入させ、回収し片付ける。



図3 個人制作「押す・まるめる」



図4 グループ制作「激しい」

【結果】

毎回制作シートの様式に変更を加えながらではあるが、動詞や形容詞を拠り所にしたことで、行為による素材の発見とイメージの具現化へつながる流れを明確に示せるようになった。表側に「～でつくる」についての記入欄を、裏側には「～をつくる」の記入欄を設け、造形アプローチの要素を直感的に対峙させるようにするなどした。また、動詞は「～でつくる」に関連し、形容詞は「～をつくる」に関連させた。これにより造形活動の二つの側面が相互に連動していることを示すようにした(図5)。

2017年度は課題を終えた後にアンケートを行った。「課題の目的はわかりやすかったか」については、わかった52人、どちらでもない4人、わからなかった0人であった。「課題を終えて収穫があったか」についてが、あった51人、どちらでもない5人、なかった0人であった。また、これまでに提出された制作シートによると「目的がないという点が難しい」「自分が思うように表現できたらよかった」など、目的に対してうまくいかないことの自己評価が散見されたが、これは造形活動の二つの側面を比較することによって気付いた感想であった。裏返せば技能面についての収穫を得ていないとも受け取れる。「手を動かしていると想像以上のものができた」「次から次へと想像が膨らんだ」との記載も見られ、遊びで終わってしまうことは以前より少なくなったようである。

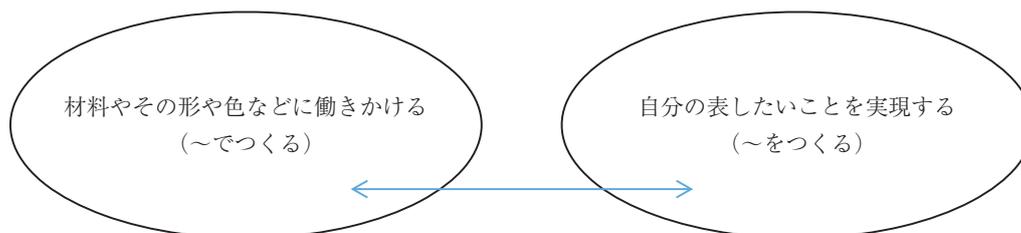


図5 造形活動の二つの側面の図式化

(3) 2018年度から変更した内容

制作シートの記述による省察により、改訂後の学習指導要領で造形遊びに関連づけられた「思考力、判断力、表現力等」、「知識」の要素については対応してきたと考えている。これは、造形活動の二つの側面を「～でつくる」と「～をつくる」と言う言葉に置き換えながら活動する際に必要となる要素のためである。ただ「技能」面についてはこの実践方法では得るものが少ないと言える。そこで造形遊びがその先に続く造形活動につながるものになることを意識しながら、技能習得についての要素を取り入れることにした。

制作シートに記述をするようになってから、1回目の実践で造形遊びの要素や、造形活動の二つの側面の理解が進んできているため、2回目を行うグループ制作を一旦休止し、実践の時間を確保した。

【方法】

変更点は、「～でつくる」の解釈を広げることである。土の表情を発見することに特化した「土でつくる」とこの実践はそのまま継続し、2回目の実践時に「粘土をひも状にしてつくる」「粘土をくりぬいてつくる」とい

う設定で行った（図6）。

#### 【結果】

技能面の観点で制約を設けたことにより、新たな問題が生じた。提示した技法の先には技法本来の造形目的があるため、技法を一つの行為として捉えようとしても、何を生み出す技法なのかということが見え隠れしてしまう。具象造形か抽象造形か、実用造形なのかということによって、同じように見える技法でも意味が異なってくる。何のために「ひも状にしてつくる」と「くりぬいてつくる」を行うのかを設定しないまま出来上がったのは、粘土をひも状やくり抜くことによる「構成作品」であり、制作過程や結果を見る限りでは、造形遊びの過程から得る素材面、技術面の気づきとして特筆できる効果が少なかった。制作シートに記載されたものとしては、「技術はそんなに必要がなかった」、「どう組み合わせる作品を完成させるか」といったものであった。

この結果を受けて、クラスが新たになった際の実践では、「ひも状にしてつくる」「くりぬいてつくる」を変更し、「ひも状にして器をつくる」「くりぬいて器をつくる」という実用造形の目的を加えた実践を行った。目的を明確に示し過ぎることで、造形遊びの過程から発見する要素を見失うのではないかと考えたが、制作中の様子や提出された制作シートからは、どうすれば粘土が器状にしっかりと立ち上がるのかといったことについて、試行錯誤を重ねる姿勢や形跡が見られた。制作シートに記載されたものとしては「ひとつひとつしっかりつけておかないと後で困った」、「整えながらが大切」、「重ね方によって出来上がりの質が違っていると感じる」といったものだった。一方で「器を作ることに囚われて自分の創造力が働きのくい」という造形遊びの原点にかかる指摘もあった。以下に示した写真は、評価によるものではなく、全ての学生が行ったものから無作為に抽出したことを申し添えておく。写真では分かりにくいかもしれないが、「～して器をつくる」の設定では、くり抜いてつくる際には外面の形を活かしながら作業を進め、ひも状でつくる際には指を縦方向に動かして粘土をなじませることを行っている。目的があることによって技術面での工夫が生まれている（図7）。



図6 ひも状やくりぬいてつくる



図7 ひも状やくりぬいて器をつくる

## 4. 考察

粘土を器状に立ち上げる作業は、ひも状にした粘土を積み重ねるだけでは形成できない。一段一段内側に回転させながら、指先で均等に圧力を加え続けることによって、粘土が縮まり器状に立ち上がっていく。この技能は、「ひも状にしてつくる」という技術の設定のみでは、習得が難しいことが制作シートに記入された感想からもわかる。今回の実践からは、器という目的があることによって、粘土を均等に締めなければ立ち上がっていかないという発見を得ることができている。

「器を作ることに囚われて自分の創造力が働きのくい」との指摘があったことから、目的は器ではなくとも、技術を必要とする目的設定ならば良いと考える。教員養成の授業課題としては、例えば「儂い」という形容詞を設定するならば極限まで粘土を薄くすることや、また「静寂」というイメージに対してであれば限りなく粘土の表面を平らにする技術を追求することなどは、技能を育成する造形遊びとして効果があると考えられる。この場合、一定の技術が必要になる目的設定であることや、様々な試行錯誤の可能性を予測し、道具や環境を準備しておくことが教員側に必要だと考える。また、目的に対する素材と技能の関係を、絶えず顧みるよう誘導することも必要である。技法や技術は目的達成のために必要なもので、技能はその過程を経験することによって培われる

ものであると言える。「技能」について造形遊びをする活動のなかで設定をする場合、技術の意味を発見できる目的設定によって意義が深まると考える。

## 5. 工芸分野から見た造形の要素

最後に、教科の目的である「できるようになる」ことについて、筆者が専門とする工芸制作の観点から述べておきたい。工芸における造形概念は、応用美術としての範疇、つまり使うことを念頭に作られる観点が一つにあるが、一方では、土や金属といった素材の構築過程と作者の創作意欲が連動して形を生み出す「工芸的造形」<sup>11)</sup>や、身体の直接性についても論じられた「実材表現」<sup>12)</sup>と言われる造形概念などがある。例えば、日常での使用を主目的にしない造形が工芸として成立するのは、これらの概念が主な拠り所になり得るからである。それぞれの造形思考によって、制作根拠や制作アプローチは異なり、民藝的な器から前衛的なオブジェまでが工芸として扱われている。

「工芸的造形」では、自己表現という目的と、素材や技術による制作プロセスの融合・一貫性が説かれ、「実材表現」では作者自らが素材と直接関わり合い、自然と作品を生み出していく身体性の要素が説かれている。身体性の要素とは、技術を体に馴染ませた手業の要素である。この要素の習得には、言うまでもなく膨大な時間と経験が必要になり、制作者のモチベーションが续かなければ達成できない。このモチベーションの維持は作る喜びという次元だけでは語れるものではなく、多くの苦難を伴うものでもある。濱田庄司が、数秒で釉薬をかける手業を、「15秒プラス60年と見たらどうか」<sup>13)</sup>と述べたことから、身体の動きや無意識的な感覚によって作品生成に至るまでの厳しさがわかる。また民藝の世界でよく聞く話であるが、釉薬の調合で原料を計らなくとも、手合わせのみで最適な調合にするといった技能がある。手による技術が行き着く先とはそういう段階である。ただし、教員養成においてはもちろんだが、技の習得ありきを肯定しているわけではない。制作過程の試行錯誤が、技能の獲得によって停止する状態に陥ることがあってはならないからである。手による技術を習得する過程そのものに、制作者の工夫があり創造性が隠れている。工芸で「できるようになること」は、素材の特徴と目的が絡み合いながら試行錯誤を繰り返すことによって、無意識に反応する身体の技術が創造的に発揮されることだと考える。

## 6. まとめとして

エルンスト・レットガーは「人間は遊びにおいて材料の性質を知り、造形において経験をつむ。そうして、また目的に拘束された対象に意味のある形を与えることができるようになる」<sup>14)</sup>と述べている。発見と経験によって創造の意思が形作られることを伝えており、造形遊びの活動がやがて目的につながっていくものであることを暗示している。このつながりは目的へ向かって直線的に進むものではなく、遊びによって発見した原点に立ち返ることも時に必要となる。前掲した図5では、学習指導要領で示される造形活動の二つの側面を楕円で表したが、相方向でつなぐ矢印は、試行錯誤し続ける状態を示したものとして捉えて頂きたい。

今回、教員養成での造形遊びに関する授業実践と課題の考察を行ったことから、以下の事柄をできるようになることの要点として挙げておく。

- ・実材や技術から得た発見を、目的に変換できるようになること
- ・目的達成に対して不足している要素を、試行錯誤する中で技能として蓄積できること
- ・身体が素材や技術に無意識に対応できる段階の、技能意識を理解できること

試行錯誤の経験はやがて無意識のうちに目的を見出し、必要な技術が身体に溶け込む過程において技能へ転化していく。造形遊びの活動が、物を作ることへの探求につながる支援となるには、過程の意味を想像し問い続ける姿勢を持つことが大切だろう。

## 註

1) 「教科内容学に基づく小学校教科専門科目テキスト図画工作」、鳴門教育大学教科内容学研究会編、徳島県教育印刷株式会社、2015年

- 2) 内藤隆, 前掲1) と同名の試案版テキスト, 鳴門教育大学編集/発行, 2014年, 本テキストの「はじめに」の項で示された運営図を基に, 毎年改訂し配布されている図版。
- 3) 「小学校学習指導要領解説図画工作編」, 文部科学省, 2008年, p. 11  
「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説図画工作編」, 文部科学省, 2018年, p. 21
- 4) 武市勝, 山田芳明, 「図画工作科の実技指導能力を高める美術教育グレードテキスト」, 鳴門教育大学教職キャリア支援センター発行, 2011年, pp. 26-27
- 5) 野崎窮, 「生徒自身の手をモチーフとした塑造の意味について — 中学校美術科の教材研究として —」, 鳴門教育大学研究紀要第33巻, 2018年, p. 438
- 6) 「小学校学習指導要領解説図画工作編」, 文部科学省, 2008年, p. 15
- 7) 「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説図画工作編」, 文部科学省, 2018年, p. 23
- 8) 「ベーシック造形技法」, 建帛社, 2006年, pp. 160-161, 高石次郎, 「陶芸教育のあり方<こと>的陶芸プログラム」で示された実践内容も参考としている。
- 9) エルンスト・レットガー, 宮脇理訳, 「土による造形 造形的手段による遊び3」, 造形社, 1977年, p. 6, 粘土の量をわずかな量しか与えないことの問題点が指摘されている。
- 10) 内藤隆, 栗原慶, 「教師教育のためのアプローチを図画工作の授業から考察する」, 日本教科内容学会第3回研究大会要旨集, 2016年, pp. 32-33
- 11) 金子賢治, 「現代陶芸の造形思考」, 阿部出版, 2007年, p. 49
- 12) 外館和子, 「日本近現代陶芸史」, 阿部出版, 2016年, pp. 37-39
- 13) NHK 鑑賞マニュアル美の壺 file200 「益子焼」, <https://www.nhk.or.jp/tsubo/program/file200.html>, (2018年9月28日アクセス)
- 14) 前掲9), p. 8

#### 図版の出典

図版として提示した学生の作例写真は, 筆者の撮影によるものである。

# **Research on Challenges of 3-Dimensional Representation of Arts and Crafts in Teacher Training :**

## **Focusing on Clay Modeling Lesson Practice Content**

KURIHARA Kei

In the New Guidelines for teaching arts and crafts in elementary schools, “What will become possible?” is an assessment criterion with the aim of developing students’ abilities in relation to the three common pillars of each subject. Students who aspire to be arts and crafts teachers must have a certain level of practical skills to expand the lesson. Hence, we examined whether the process of competence development for student modeling is appropriate in arts and crafts, which the author is responsible for. To improve proficiency in production techniques, we found that it was effective to add the purpose of creation to the creative approach envisioned from the materials.